「おおいた教育の日」

エッセー作品集

平成17年度～平成21年度

大分県教育の日推進会議
大分県教育委員会

「おおいた教育の日」エッセー作品集の刊行に当たって

大分県教育の日推進会議　会長　三浦　啓亨

大分県では、県民の皆様の教育に対する関心と理解を深め、学校、家庭、地域社会の相互の協力により、明日の大分を担う心豊かでたくましい子どもたちを育成するために、「おおいた教育の日条例」を平成17年3月に制定しました。

以来、その趣旨を普及するため、ＰＴＡや学校関係団体をはじめとする117団体で構成する「大分県教育の日推進会議」を中心に、「おおいた教育の日」推進大会等、さまざまな取組を行っています。

「おおいた教育の日」エッセーの取組もその一つであり、これまで5年間「私が教えられたこと」をテーマに、県民の皆様から毎年500点を超える応募をいただいてきました。作品の中には、作者の生き方に影響を与えた父母の言葉や、教師の教え、子どもから学んだことなどへの思いが込められ、毎年「おおいた教育の日」推進大会で発表される最優秀や優秀となった作品は、会場参加者の感動を呼んでいます。

そのような中、これらの作品を、「もっと広く、多くの県民に読んでほしい」「学校でも児童、生徒に読んでほしい」との声を多くいただいたことから、このたび「おおいた教育の日」エッセー作品集として刊行することとなりました。

今回の作品集には、平成17年度から平成21年度までの5回の取組の中で、最優秀、優秀となった作品、全27点を掲載しています。どの作品も心に残るものばかりです。教育関係者をはじめ、PTAや地域の皆様にも、ぜひご一読いただきますとともに、学校教育のさまざまな場面で活用していただければと願うところです。

県教育委員会でも、学校、家庭、地域社会の大人たちの教育の協働を「『協育』ネットワーク」として、県内の多くの市町村と協力し、その構築を進めています。大分の次代を担う子どもたちのために、「おおいた教育の日」の取組への一層の御理解と御協力をお願いし、刊行に当たってのごあいさつとさせていただきます。

終わりに、刊行に当たりまして、御協力いただきました皆様に、心から感謝と御礼を申し上げます。

平成22年3月

「おおいた教育の日」エッセー作品集　目次

テーマ　「私が教えられたこと」

平成 17 年度　最優秀・優秀作品

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「先生と生徒」　江口八重子（えぐちやえこ）さん（津久見市）　・・・・　1
○優秀賞
「大きな夢、大切なこと」　梶原（かじわら）　俊江（としえ）さん（大分市）　・・・・　3
○優秀賞
「未来をあきらめない力」　佐藤（さとう）　明子（あきこ）さん（島根県）　・・・・　5

平成 18 年度　最優秀・優秀作品

【 一般の部 】

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「東を向いて笑う」　有田（ありた）　英樹（ひでき）さん（中津市）　・・・・　7
○優秀賞
「夢に向かって」　矢口（やぐち）　利子（としこ）さん（愛媛県）　・・・・　9
○優秀賞
「私の１８年間」　山本（やまもと）　健悟（けんご）さん（別府市）　・・・・　11

【 小・中・高等学校の部 】

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「私が教えられたこと」
伊藤（いとう）　暦（こよみ）さん（県立日田三隈高等学校３年）　・・・・　13
○優秀賞
「真夏の言葉」
秋吉（あきよし）　美幸（みゆき）さん（大分市立明野中学校３年）　・・・・　15
○優秀賞
「そまつにしたら　ばちかぶるよ！」
高野（たかの）　葵（あおい）さん（竹田市立祖峰小学校４年）　・・・・　17

平成 19 年度　最優秀・優秀作品

【 一般の部 】

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「彼も人なり我も人　努めて及ばぬことやある」
佐藤多美子さん（別府市）　・・・・ 19

○優秀賞
「顔を見る教育」　池永　朋美さん（大分市）　・・・・ 21

○優秀賞
「私が教えられたこと」　岡本　京子さん（中津市）　・・・・ 23

【 小・中・高等学校の部 】

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「おはよう、おじちゃん」
須股　凜 さん（日出町立日出小学校３年）　・・・・ 25

○優秀賞
「命あるかぎり」
伊澤　春香さん（県立大分豊府中学校１年）　・・・・ 27

○優秀賞
「ホスピスで学んだこと」
貝掛柚香子さん（岩田高等学校２年）　・・・・ 29

平成 20 年度　最優秀・優秀作品

【 一般の部 】

○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「T 先生の答え」　有田　英樹さん（中津市）　・・・・ 31

○優秀賞
「ボランティア活動の中で教わった人生」
吉岡　信子さん（大分市）　・・・・ 33

○優秀賞
「心の声を交わしながら」　衞藤　浩明さん（宇佐市）　・・・・ 35

【 小・中・高等学校の部 】
○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「私が教えられたこと」
姫野（ひめの）　昂志（たかし）さん（県立大分南高等学校３年）　・・・・ 37
○優秀賞
「家族っていいな」
須股（すまた）　蓮（れん） さん（日出町立日出小学校４年）　・・・・ 39
○優秀賞
「いま、学ぶということ」
古田（ふるた）　慧介（けいすけ）さん（佐伯市立蒲江翔南中学校２年）　・・・・ 41

平成 21 年度　最優秀・優秀作品

【 一般の部 】
○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「みんなで登ろ！」　渡邉（わたなべ）　一司（ひとし）さん（宇佐市）　・・・・ 43
○優秀賞
「人を大切にすることを教えてくれた祖母」
糸永（いとなが）ケサヨさん（国東市）　・・・・ 45
○優秀賞
「私が教えられたこと」　太田由紀子（おおたゆきこ）さん（大分市）　・・・・ 47

【 小・中・高等学校の部 】
○最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）
「100 キロメートル徒歩の旅で学んだこと」
楠（くすのき）　春華（はるか）さん（中津市立鶴居小学校５年）　・・・・ 49
○優秀賞
「祖母からもらった勇気」
渡邉（わたなべ）　一路（いちろ）さん（県立大分豊府中学校２年）　・・・・ 51
○優秀賞
「私が教えられたこと」
佐脇（さわき）　沙織（さおり）さん（県立佐伯鶴城高等学校１年）　・・・・ 53

※　年度ごとに最優秀賞、優秀賞の順で掲載しています。なお、在住地等及び学校・学年については受賞当時のものです。

「おおいた教育の日」エッセー

平成１７年度
最優秀・優秀作品

テーマ：「私が教えられたこと」

「一般の部」最優秀作品

「先生と生徒」

江口八重子

私が小学校６年生の時、妹が生まれた。父が仕事の都合で休めないので、長女の私が学校を休んでお家のお手伝いをすることになった。

昔のお産は自宅で産むのが普通であった。

私にはすでに妹や弟がいた。父から「八重ちゃん、お父さんが休みがとれんから、２日程学校を休んで家のことしてくれんかなァ。そしたら後はお父さんが休めるから・・・。」と言われたのである。私は早速学校へ出す欠席届けを書くことにした。私たちの学校では、欠席届けを事前に必ず届けるというきまりがあって、その欠席届けも先生から書き方を教えられていた。まず、「欠席願い」と書いて、「何月何日から何日まで何日間、私事により欠席致しますのでお願いします」と名前を書き、校長先生あてに届けることになっていた。その欠席する日は、ちょうど国語の中の１ページを暗唱する課目の宿題が出され、それを発表する日になっていた。

私は欠席届けを書いた後、別の便箋に手紙を書いた。私は手紙に「先生、昨夜母に赤ちゃんが生まれ、父が休めませんので、私がお手伝いのため２日間学校を休みます。今日はちょうど、国語で〇〇を暗唱する宿題があって、私もお勉強したのに残念ですがお休みさせてください。」と書いて、いつも誘い合せて学校へ行く友達の春ちゃんに、欠席届けと一緒に言付けた。

朝は父が食事の支度をしてくれ、妹は学校へ行き父も仕事へ出かけていった。

いよいよ、私の出番だ。私は母に教わりながらエプロンを着け、お湯を沸かしたり、たらいを出したりした。赤ちゃん用のタオルやおむつも畳んだり広げたりしながら産婆さんを待っていた。約束の時間に産婆さんがきて、赤ちゃんの湯浴みが始まった。産婆さんは薬品の匂いの

する大きなエプロンを着け、赤ちゃんを抱き上げた。赤ちゃんは小さな手でしっかり握りこぶしをつくっていた。産婆さんが帰って、赤ちゃんが寝てから、母におじやご飯を作ってあげた。母は「八重ちゃん、明日はもう大丈夫だからね、学校へ行きよ。」と言ってくれた。「母ちゃんがいつもしてくれているから、今日は私がする・・・。」私は２日休んだ。３日目は父も休みで赤ちゃんの世話をした。赤ちゃんは、私たちも飲んだであろう母のおっぱいを元気よく吸っていた。

４日目は母も起きたので私は学校へ行った。そして国語の時間が始まった。私はもう、すっかり忘れて宿題のことなど思い出しもしなかった。ところが先生は「さあ、Ｋさん、今日は〇ページの暗唱をしてもらいましょう。」とおっしゃった。私は驚いてしまってすぐには言葉も出なかった。もうすんだはずの宿題を今ごろ、なぜだろうと思った。先生はにこにこして、「実はね、あなたがお手紙くれたので、みんなであなたが来るまで宿題を日延べして待つことにしてたのよ・・・。赤ちゃんはどう、可愛いですか、名前はもうつけたの・・・。」とおっしゃった。私は先生とみんなの好意がうれしいやら、恥ずかしいやら・・・。ドキドキしながら起立して暗唱した。私がその暗唱を覚えたのはもう５日ほども前のことで忘れかけていたのである。でも、すらすら暗唱出来て、みんなから拍手をもらった。私はこの時の先生の配慮と優しさを、そしてクラス全員の温かさをしみじみ感じた。遠い昔のことだけど、今のように人を蹴散らしても表に出たい社会では、とても考えられない事かも知れないが、いまだに忘れられない「花明り」のようなほのぼのとした思い出となっている。もう先生もクラスの人々も音信は途絶えているけれど、校庭にあったポプラの木とこの思い出のひとこまは、終生の教えとなった。とても小さな事だけど、こんな小さな事が積み重なって人格は創り上げられるのではないだろうか。私はこの先生との温かい思い出を一生の財産だと思っている。

「一般の部」優秀作品

「大きな夢、大切なこと」

梶原　俊江

「きちんと仕事のできる人になりたい。」田川君は、しっかりとした声でそう言った。

大分市内の中学校に補助教員として赴任したのは１年前のことだ。

小さい頃に大病を患い、運動機能障害と学習障害が残った田川君は３年生。私は彼の校内での歩行と学習のサポートをするため１年の任期で採用された。教員資格や実務経験がなかったため、初めはどんなふうに接してよいのかわからず不安もあった。

田川君は通常学級に在籍し、教科によって通級指導教室で勉強をしていた。通級指導教室である若草学級の３年生は田川君を含めて３人だった。

中学３年生の２学期は、高校受験に向けての授業の追い込みと、進路や将来について考える授業が増えてくる。３人は、養護学校の高等部への進学を考えていた。若草学級の担任の先生は個性豊かな３人の進路や将来について心を配り、野菜作りや季節の行事など、さまざまな体験学習の取り組みをしていた。

10月のある日、「将来の夢」というテーマで、なりたい職業などをレポートに書き、発表する授業があった。

「書き終わった人から発表してね。」先生の声に、まず渡辺君が手を挙げた。

「ぼくは、ミュージシャンになってテレビに出たいです。」大きな声で発表した渡辺君はダウン症の男の子。自分の世界を持つ彼にとって、集団生活はたいへんなこともあったと思う。しかし純粋で曇りのない彼の笑顔は周囲の人を優しい気持ちにしてくれた。

次に、恥ずかしそうに手を挙げたのは、斉藤君だ。

「…焼き鳥屋さんになれたらいいな…。」交通事故のため学習障害がある斉藤君は若草学級のリーダーだ。何かと二人の文句を言いながらも、階段ではそっと田川君に手を貸したりする優しさを持っていた。

二人が発表している間も一生懸命書き続けた田川君が手を挙げた。

「ぼくは、大人になったら、きちんと仕事のできる人になりたいです。」彼はそう言って、満足そうに席に座った。

私はドキッとした。当たり前のことかもしれないが、つい忘れてしまいがちな大切なこと。具体的な職業ではなく、生き方を将来の夢にした田川君はとても大きく見えた。

田川君は野球が大好きで、昼休みはほとんど毎日校庭で一緒に遊んだ。特に好きだったのが三角ベースだ。田川君がバッターの時、球を打ち返せるのは10球に1球で、走ってもすぐにアウトになった。それでも彼は「次はホームランを打てる。」と信じていた。同じチームの友達が三振すると、「へたくそだなぁ。」などと文句を言い口喧嘩になることも時々あったが、自分の気持ちに妥協することがなかった。

勉強では、難しい問題が解けた次の日に簡単な計算が解らなくなることがあり、進んでは戻り、立ち止まってからまた一歩進む状態だったが、彼はいつでもふてくされずに、前に向かって歩み続けた。その様子は気負うことなく、人に惑わされることもなかった。

つい時間に追われあせる私は、彼の大らかさに初めの頃は戸惑った。しかし、いつしか自分のペースだからこそできること、自分を受け入れること、あきらめないことの大切さを教えてもらった。

それから５ヵ月後の３月、田川君たちは卒業し、私も任期を終えて中学校から新しい職場に移った。毎日の暮らしに疲れたり、くじけたり、いい加減になりそうな時、彼の言葉と姿が脳裏に浮かぶ。

田川君の夢を私も目標にしていきたいと思う。田川君、ありがとう。

※文中の名前や学級名は仮名です。

「一般の部」優秀作品

「未来をあきらめない力」

佐藤　明子

夏休みに入ったばかりの暑い昼さがりに、中学３年生になる長女の家庭訪問があった。担任の先生は、汗をふきながら、「今日はまた特別暑いですね。」と、時候の挨拶を皮切りに、二、三、世間話をし、本題を、切り出した。「娘さんの成績では、第一志望はむかないと思いますね。」

「無理」と言わず、「むかない」と言ったのは、せめてもの思いやりのつもりなのか。けれど、私は何の落胆もしなかった。なぜなら、母親である私がかつて、同じように言われていたからだ。むしろ、なつかしささえ感じる言葉である。

25年前の、やはり夏だったか、中学３年生の私と母に担任の先生は、「合同選抜どころか、今のままでは、通る高校なんてどこにもありませんよ。」と、模擬試験の結果を見ながら、無表情で言った。それとは対照的に、母の顔には、どのような表情がうかんでいただろうか、怒りか、悲しみか、落胆か、こわくて見られなかったので、知る由もないが。

それから３年後、私は、合同選抜の３校のうちの、ある高校の３年生になっていて、また、相も変わらず、２年間の不勉強のつけに苦しんでいた。数学など、もはやそれが、数字なのか、物理なのか、どこかの国の語学なのか、問題を見ても爪の先ほども見当さえつかず、テストの時も、時間をもてあまし、壮大な夢を見て、終了のチャイムでおこされるしまつだった。同じ進学校の生徒でありながら、私は、「キリ」であり、「ピン」の人達は、東京大学をはじめ、きらびやかな一流大学を、目指していたのである。そういう人達の、学問に対する姿勢を間近で見ながら、私は、心からの尊敬と羨望のまなざしを、彼らにおくっていた。そして、彼らは頭の良い人、私は頭の悪い人と、もう自分で決め

ていて、というより、高校１年、２年と、「この成績では…」と、先生に言われ続けていたので、もう、そういうものだと、決定事項のように思いこんでいた。

ところが、である。高校３年の進路指導の時間に、担任の先生が、思いもよらぬ言葉を口にされたのだ。自分の偏差値とてらしあわせて、適当に、志望校をつげる私に先生は、「君が一番行きたい大学は、ここなのかい？」「先生、私、本当は早稲田大学の第一文学部に行きたいのです。」

なぜ、こんなことを口走ってしまったのか。穴があったら入りたい。猛烈に後悔した。経験上、一笑に付されるであろうことは、容易に想像されたからだ。

「そうか。通るぞ。まだまだこれからや。君の行きたい大学の、どこだって合格するぞ。」今、娘に言ってやりたいのは、まさしくこの言葉であって、高校生の私はこともあろうに「ひとごとだと思って、適当な事を言う先生だよ。勉強してないんだから、もう遅いよ。」と、友人と陰口をたたいたのである。つまり、あきらめたわけである。今なら、先生の言わんとしている事は、痛いほどわかるのに、時すでに遅し、である。

結局、ワセダ大学の門をくぐる事はなかったが、進学した大学の図書館で読んだ、新渡戸稲造の教育論には大変感銘を受けた。うろ覚えであるが、このような事が書いてあった。「教育とは、教え、うなずかせ、慰めることだ。」と。

不合格のつらさを味わわせるわけにはいかないので、「無理だ」と言う多数の先生の心遣いもわかる。けれど、若者が未来をあきらめず、たちむかう力を育むのも、大切な教育だと思う。教育とは、おどすことではなく、慰めることだと、大人はこころえたい。あきらめていいのは、過ぎてしまった過去だけで十分である。

「おおいた教育の日」エッセー

平成18年度
最優秀・優秀作品

テーマ：「私が教えられたこと」

「一般の部」最優秀作品

「東を向いて笑う」

有田　英樹

大人って理不尽だよな。

子どもの頃、そんなふうに思っていました。近所のおじちゃん達もそう。学校の先生は少しましだけど、やっぱり同じ。お父ちゃんやお母ちゃんなんて、遠慮がない分、ひどい、ひどい。

でもね。僕、46歳にして、今、少しわかるんです。そんな理屈を越えた大人の言葉の中に、何かしらの真実があった・・。正しいとか正しくないとかいうような目盛りでは計れぬ、人としての知恵があった。そうも、思えるんです。

科学の進歩、あふれる情報、グローバルスタンダード。親の世代までは考えられなかったうねりの中に、僕らが捨て去ろうとしている計測不能な理不尽さ。少し立ち止まるべきかも・・。そんな気もするんです。

幼かった頃、お初物を頂く時には東を向いて笑う、という妙なしきたりが、我が家にはありました。

お初物のさつまいもが食卓に並べば、母が、こう言うんです。

「さあ、今年初のおさつや。東を向いて、大きな声で笑いなさい。」

そして、僕らは「わははは。」と笑う。それが、来年も健康でおさつを頂けるようにって願掛けなのです。

そのしきたりが原因で、ちょっとしたトラブルが起きました。それは、僕が小学５年生の時でした。

食卓には初カボチャの煮物が並んでいました。父は出張で、その晩は僕と母の二人だけ。母がいつものように言いました。

「さあ、東を向いて、笑いなさい。」

でも、僕はいつものようには笑いませんでした。だって、小学校の高学年ですよ。そろそろ反抗期。加えて、重石のような父は留守。条件はそろっています。ニコリともせずに、こう言い返しました。

「お母ちゃん、こんなん、おかしいやんか。」

きょとんとする母に、畳み掛けます。
「なんで、笑って食ったら、来年も食えるんか。科学的におかしいやんか。」
完全勝利を信じた僕の鼻の穴は大きく膨らんでいたことでしょう。しかし、母は哀れむような目で言いました。
「お前、学校行って、何、勉強しとる？」
意表をつかれました。だって、学校とは何の関係もないことでしょ。しきたり自体の理不尽に加え、この言葉。でもね、あまりにも意外な言葉は強いんです。言い返す言葉が見つからない。母は続けます。
「お初物のカボチャが出た。黙々と食べるのと、家族がそろって笑って食べるのと、
どっちがいいか、わからんか。」
「・・・・。」
「何が科学的や。皆で笑う・・。それが幸せや。そこに、理屈は、いらんぞ。お前、学校に行って、何、勉強しとる？つまらん理屈を覚えて、カボチャ頭になっとるぞ。種ばかり増えたカボチャは、実が少なくなっておいしくないんだ。」
黙り込む僕に、母はニコリとして言います。
「勉強は『小利口（こりこう）のバカ者』になるためにするんじゃない。何のための勉強か、考えてみい。ほらほら、はよう笑って頂きなさい。」
僕は、なめくじのようにしぼみました。

それから、30年以上が過ぎ、母はずいぶん前に亡くなりました。そして僕は二人の子を授かり、新しい家庭を持つことができました。
母はいない。偏屈だった父も年老いた。でもね。僕は、笑ってるんです。東を向いて。

「一般の部」優秀作品

「夢に向かって」

矢口　利子

８年ほど前、某テレビ局で「夢は遙かな山々へ」と題した、人間ドキュメンタリー番組を放映したことがあった。そこには、老いてなお夢に立ち向かう、凄まじいまでの山男の姿が映し出されていた。

福岡の大学教授（元医師）Ａさんである。85歳という高齢でスイスのマッターホルンを登頂、しかも国内外合わせてこの時が200登目だと言っていたが、あのパワーは一体どこから生まれてくるのだろうか。そのＡさんが若い頃ドイツに渡り、師と仰ぐシュヴァイツァー医師と共に医療に携わる中で、教えられた言葉があったという。

（人は年をとるから老いるのではない、夢を失った時老いが始まる。いつまでも夢に向かって精進しなさい）

ガーンと一発パンチを喰らったようなショックを覚えた。まもなく人生の節目である還暦を迎えようとしていた矢先のことであった。これといった夢も目標もなく、ただ毎日を無抵抗のまま流されているだけの私に、何をやっているんだと言わんばかりに、叩きのめされたような気がした。

天を突くようなマッターホルン（4,477 メートル）の頂上をめざして、体力の限界と闘いながら、力強く一歩一歩確かめるように登っていく。ただ黙々と雪を踏みしめていた強靱な横顔がとても印象的で、山頂にたどり着いた瞬間、わたしは感激のあまり思わず涙があふれてしまった。

素敵な人生を歩んでいる人は、自分なりの価値観や、他人に流されない確固たる信念を持っていて、自信に満ちあふれている。柔和な表情やしぐさ、穏やかな語り口調、百戦

錬磨の強者らしい鋭い眼差しに、キラリと光る品格さえ感じ取れた。

来し方を振り返れば、心に感銘を受けた言葉は数知れないが、そのひとつひとつをなぞってみると、なぜか、すべて「夢」に辿り着くから不思議だ。不甲斐ない私にも、数多くの夢を見てトライした過去がある。たとえそれが挫折という形で終わったとしても、決して無駄ではないのだと、この言葉を聴いてそう思えるようになった。

2002年の暮れに、夫がパソコン・デジタルカメラ・プリンターの一式を我が家に持ち帰ってきた。ご多分に漏れず、ついに夫もパソコンを始めるのかと思いきや、

「僕は全く興味ないから、母さん、早速パソコン教室に行って習ってこいよ」

否応なく、翌年から教室に通うことになった。65歳の春のことである。初めのうちはごく簡単なカリキュラムで高齢者を飽きさせない。初級を終え、中級にはいると途端に難しくなり、偏頭痛に悩まされ、途中で用事と偽り、教室から抜け出したこともあった。（どうしてこんなことを始めたんだろう）後悔しきり、夫を恨めしく思い、パソコンなんかもうやめようと悩みもした。やがて一歩進んで二歩も三歩も戻りつつ、メールやインターネット、デジタルカメラで撮った写真を取り込み、交信できるようになったではないか。

（人は年をとるから老いるのではない、夢を失ったとき老いが始まる。いつまでも夢に向かって精進しなさい）

あの日以来、座右の銘は？と聞かれたら、胸を張り「夢に向かって」と答えてしまうほど、私の心に強烈に刻み込まれたことを思い出す。

そして、68歳になった今も、小さな夢を追い続ける毎日である。

「一般の部」優秀作品

「私の１８年間」

山本　健悟

私は、極小未熟児。その上、二分脊椎症という病気を持ってこの世に生を受けた。

この病気は、背中と背骨に穴があいて神経が麻痺する病気だ。両親は福岡・山口・東京と様々な病院に連れて行ってくれたが、下半身の麻痺は、まだ治っていない。

小学校入学の際、両親は普通校か、それとも養護学校に入学させるかで悩んだそうだ。

しかし、私は幼稚園の頃の友達と一緒に普通校に行きたいと思っていた。そんな私の思いを知った両親は普通校に入学させることを決めたそうだ。

しかし、小学校側は、

「障害児学級ならばいいが、普通学級ではだめだ！」

と言ったそうだ。だが、両親は諦めずに何度も学校に話し合いに行ったそうだ。その結果、

「いじめなどがあったらという心配はあるが、まあ、いいだろう。」

と言ってくれたそうだ。

小学校に入学後、しばらくは、やはりいじめられていた。しかし、いじめられる度に、

「オレはオレ、こんな体で何が悪い。お前達がこんな体だったらやっていけるか。」

と言っていた。そして、３年・４年と学年が上がっていく内にいじめはなくなっていった。

小学校の低学年までは、運動会などでは周りに迷惑がかかるからとハンディをもらうのが当たり前とされていた。本当はみんなと同じ様に走りたかったのだが、それを言う勇気が無く、自分から引いてしまっていた。しかし、担任の先生が私の気持ちを汲んでくれ、クラスのみんなに向かって、

「健悟は特別ではない。このクラスの一人ではないか。健悟だけハンディがあるのはおかしい。」

と言ってくれた。それからは、体育や中学の部活などハンディをもらわずに積極的に取り組んできた。

高校での、競歩大会では１年の時、半分しか走れず、とても悔しい想いをした。だから、２年になったら絶対に完走したいと思っていた。

大会当日、本当に自分は最後まで走ることができるのだろうか、と少し不安に思っていた。しかし、そんな私を見て、担任の先生が、

「健悟、大丈夫だ！お前なら完走できる！それにどんなに遅くなっても、オレが一緒に走ってやる！」

と言ってくれた。その言葉で気持ちが楽になり、安心して走ることができた。途中、足が痛くなり何度も諦めそうになった。しかし、すれ違う友達がみんな、

「健悟、頑張れ！」

と言ってくれた。それだけで、足の痛みが軽くなるような気がした。そして、やっとゴールがみえた時、私は、信じられない光景をみた。２年生全員が、ゴールで待っていてくれたのだ。その時、私は本当にいい友達を持ったと思った。

私は、この18年間、友達や先生に支えられて生きてきた。本当にみんなには心から感謝している。

しかし、私のように先生や友達に恵まれ、普通校に通える障害者は少ない。それは、おかしいことではないだろうか。

私は、障害は一つの個性だと考えている。障害はただ走るのが苦手・話をするのが苦手などと同じことではないだろうか。

世界の人々が、障害者は健常者となんら変わりがないことを理解してもらいたい。

そして、いつの日か障害者も普通校に、みんなと同じように通える日が来ることを願う。

「小・中・高等学校の部」最優秀作品

「私が教えられたこと」

県立日田三隈高等学校３年（当時）　伊藤　暦

私の学校では、２年次に「夏の活動」という取り組みがあります。夏休みを利用して自分の進路のために、上級学校のオープンキャンパス、職業人へのインタビュー、企業でのインターン・シップに参加する、というものです。

私は、迷わずインターン・シップに参加することに決めました。それは、今の私が実際に企業で働くことは、めったにできることではないし、今の自分の力を試し、新しい力を身につけられるかもしれない、すばらしい機会だと思ったからです。そして少しだけ「楽しそうだな」という気持ちもありました。

私はインターン・シップ先に、市内のある旅館を選びました。旅館を選んだのは、観光の街である日田市に暮らす私にとって、身近な職場であることや、幼い頃からよく旅館を利用していたので興味があり、その仕事の裏側を知ってみたいと思ったからです。

私は３日間、インターン・シップを体験しました。この３日間を通して、旅館に対する私の印象は、全く違うものに変わりました。インターン・シップに参加する前は、旅館は華やかで、ゆっくりとした時間が流れている場所だと思っていました。しかし、実際に働いてみると、その空間を作り出すために、裏側ではたくさんのスタッフの方々が一生懸命になって時間と闘っていました。そんな御苦労があるからこそ、旅館は美しく華やかな場所とゆっくりとした時間を、お客様に提供することができていると感じました。

例えばルームメイクでは、お客様が入れ替わるわずかな時間で、布団をたたんだり、掃除機をかけたり、拭き掃除をしたりと、とても慌ただしく時間が過ぎました。その上、布団はそれぞれにたたみ方・しまい方が決まっていたし、床の間の花の配置場所、洗面所の水滴や汚れ、座布団のシワ等、細かいところにも気を

配らなければなりませんでした。この時に、従業員の方がおっしゃった、「お客様が時間を忘れて、くつろげるように」という言葉が強く印象に残っています。この言葉から、限られた時間の中で多くのことをしなければならなくても、「第一にお客様のことを考えている」という思いやりの心が伝わってきました。

様々な場面で、人と人との間に思いやりの心が失われつつあると言われている今、私は従業員の方々のお客様に対する思いやりの心に触れました。そして私自身も「これで大丈夫だろうか」「この部屋でゆっくり過ごしてほしい」と、自然にお客様のことを思いながら、作業をすることが多くなりました。

３日間の仕事は、私の想像とは比べものにならない程きつく、大変なものでした。しかし、この自然と湧いてきた「人を思いやる心」をはじめ、実際に働いたからこそ学べたこと、得ることができたことがたくさんあります。従業員の方が初めて私の名前を呼んで下さり、仕事を頼まれた時や、「あなた達がいてくれて本当に助かった。明日からいないと思うと寂しいね。」と言ってもらえた時にはとても嬉しかったです。一つ一つの仕事をやり遂げる度に「やりがい」というものを感じました。そして、お客様に見えない所での努力があるからこそ、仕事が成り立っていること、どんな職業も絶対に必要であること、「働く」ということに決して楽はないということを、身をもって学ぶことができました。

私は将来、児童英語教師になりたいと思っています。今回の体験を通して、どのような職業も必ず必要とされることや、「見える所」「見えない所」での両方の仕事が大切であることを理解できましたし、物事を最後までやり遂げる達成感を味わうこともできました。ですから、自分の将来の夢の実現のために、これからどんなことにでも頑張れる気がしています。そして、ただ英語を教えるだけでなく、生徒の心に「何か」を残せるような教師になりたいです。従業員の方々が、私にそうしてくれたように。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「真夏の言葉」

大分市立明野中学校３年（当時）　秋吉　美幸

「廃品回収」、昔の私がとても嫌な言葉でした。とてもやる気が起きず、いつも適当にしたり、友達と話したりして、これをするダルさをまぎらわしていました。しかし、中学２年のときの経験が私の廃品回収に対する思いを変えました。

中学２年の夏、地域でする廃品回収に私は嫌々ながらも出席しました。しかし、いつも通りに適当に、ダンボールや缶、ビン、ペットボトルを分別したり、その作業が一通り終わったら、友達と話したり、ふざけたりしていました。

その時、ガラガラと大きな音がしました。音のした方を見ると、さきほどまで、私と友達が作業していたところがくずれ、グシャグシャになっていました。大人達はとても大騒ぎし、怪我をした人はいないかなど、とても必死になって探していました。私と友人はとても罪悪感があり、大人達を手伝い、なんとか缶を別の所に移動させました。幸い怪我をしている人もいなく、良かったのですが、私は自分の過失がバレるのが嫌で、その場から逃げ出したいと思っていました。

すると私の前に近所に住んでいるおじいさんが来て、

「あんた達がちゃんとしておけば、こんなに大変な事は起きんかったのに」

と言いました。

しかし、その時、ある人が、

「この子達は必死にしていたんや。そんなに責めたらかわいそうやで」

と言って私達をかばってくれました。私はその人に申し分けないと思いました。なぜなら、とても適当にして、必死にはしていなかったからです。

その後にその人が、

「あんた達も当たり前のことが上手にできんかもしれん。やけど、当たり前な事を当たり前にできるよ

うになったらな、人は成長するんや。今はまだできんでいいんや。少しずつできていけばいいんやで」と言ってくれました。私にはその言葉がとても心に響き、涙で目の前が見えませんでした。この言葉は、私達を責める言葉ではありませんでした。やさしく言い聞かせる様なこの言葉は私自身の心にしみ入っているのがわかりました。

その後から私は変わりました。今まではダルいなどと思ってしなかった事に積極的に取り組むようになりました。地域のゴミ拾いでも、皆がしていなくても、皆に呼びかけてしようとしました。でも時々嫌になったり、面倒くさくなったりしてしまいます。その時はあの真夏に言われた言葉を思い出します。「少しずつできていけばいいんやで」この言葉が無ければ今現在の私は何をしていただろうかと思います。その人は引っ越していませんが、私の心の中には今でもその言葉が響きます。

昔の私と今の私、他の人は少ししか変わったように見えないけど、私の中では、模様替えをしたように変わりました。その中の一つは、あんなに嫌であった「廃品回収」という言葉がとても好きになっている事です。なぜなら廃品回収は人の役に立っていると考えると、自分の苦しい事も平気だと思えてきたからです。

私がこんなにも色々の事に対して変われたのは、あの真夏に言われた言葉のおかげで、今の私は正しい方向へ進んでいます。でもこの言葉にたよりきりにならず、いつかは自分の力だけで歩んでいきたいです。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「そまつにしたらばちかぶるよ！」

竹田市立祖峰小学校４年（当時）　高野　葵

わたしのおばあちゃんは、『やまなみ』という所で、おじいちゃんたちのお弁当を作る仕事をしています。いつもとても元気です。

おばあちゃんはいつもわたしに、

「物をそまつにしたら、ばちかぶるよ！」

と、言います。この間は、夕ごはんの時、お肉を残そうとしたら、

「もったいないやろ。全部食べんといけんよ。」

と、言われました。わたしはにが手な食べ物が多いので、しょっちゅうおばあちゃんに注意されている気がします。注意されて、がんばって食べてしまうこともあるけれど、どうしても食べられないこともあります。そんな時は、おばあちゃんが、

「もったいないなあ。」

と言って、わたしが残したごはんやおかずを、全部食べてくれます。それだけではありません。れいぞう庫に入っていて、しょうみ期限が少し切れている食べ物でも

「しょうみ期限はおいしく食べられる期間のことやけん、ちょっとくらいは、だいじょうぶやわ。」

と言って、食べてしまったことがありました。それが原因で、食べた後おなかをこわしたけど、全然気にしていないみたいでした。

わたしとちがって、出されたものは残さず、食べるおばあちゃんですが、この前から

「やせないといけん。」

と、歩くようになりました。夜、歩いた後は食べていないけれど、朝と昼にいっぱい食べているのでやせません。おもしろいおばあちゃんです。

どうしておばあちゃんが

「物をそまつにするとばちがあたるよ。」

と言うのか考えてみたら、1学期に昔調べをしたときのことを思い出しました。おばあちゃんに子どもの

ころのおやつを聞いたら、今わたしたちがお店で買って食べているようなポテトチップスやチョコレートなどは食べたことがなかったと言っていました。おやつは、家の人が作ってくれるあられやかきもち、じりやきだったそうです。おばあちゃんが子どものころは、今みたいにいろいろな食べ物がなくて、みんなおなかがすいていました。だから、もらったおやつやおにぎりなどはだいじにだいじに食べたそうです。だから、今わたしにも、

「そまつにしたら、ばちかぶるよ。」

とか

「もったいないよ。」

と、言うんだなあと思いました。今では信じられないけれど、昔は食べるのに苦労していたんだなあと思いました。

　わたしは特にお肉がにが手です。今までは食べたくないので、おばあちゃんに注意されたり、食べてもらったりしていたけれど、これからは、野菜にまいて食べることにちょうせんしたいと思います。おばあちゃんに負けないくらい元気でいたいです。

　やさしくて、いろんな事を教えてくれる、おばあちゃんがわたしは大好きです。

「おおいた教育の日」エッセー

平成19年度
最優秀・優秀作品

テーマ：「私が教えられたこと」

「一般の部」最優秀作品

「彼も人なり我も人　努めて及ばぬことやある」

佐藤多美子

北アメリカの片田舎
見るかげもなき山がつの
家に生まれしリンコルン
まだいとけなき頃とかや
ある日心に思うよう

合衆国を打ち立てて
国の父よと末永く
世に仰がるるワシントン
彼も人なり我も人
努めて及ばぬことやある

83歳になった今日、私はいまだに如実にこのリンカーンの歌とお話は忘れることなく脳裡から甦ってきます。

今は亡き母は、毎日お裁縫をしながら私に偉人のお話や童話等、小さい美しい声で時には歌いながら話してくれました。母の傍で人形ごっこをしたり、絵を描いたりして聞いていました。偉人のお話で忘れられない人に新井白石、中江藤樹、乃木大将、義経と私にとっては勇気と活力をいただいた方々ばかりですが、とりわけリンカーンの『彼も人なり我も人　努めて及ばぬことやある』「あの人も私と同じ人間だ。あの人が出来る事を私が出来ないというのは、私が一生懸命努力して励まないからだ。努力は人を裏切らないのよ。」と言って話してくれた母の姿が昨日の如く目に浮かびます。小学校唱歌の歌詞は忘れているのに、幼児期より聞いてきた母の歌ってくれたリンカーンや義経の歌は、今でもよく口ずさむ程、鮮明に記憶しています。

これらのお話は生涯忘れることなく、私は教師になってからも生徒達によく話して聞かせました。給食時間の３分の２を過ぎた頃より偉人のお話をしてあげていました。子供達も真剣に聞いてくれました。後に金池小学校在任時の教え子のＭ君から、九州大学を卒業して時事通信社に入社しましたと、背広姿の凛々しい写真と一緒にお手紙をいただきました。今だに忘れる事のない感動した手紙で

した。

「『彼も人なり我も人　努めて及ばぬことやある』僕はこの言葉を『座右の銘』として一生懸命励んできました。」という文面を見た時、心の底からうれしさが込み上げると同時に母に対して感謝の念でいっぱいになりました。

リンカーンが電気もない鉛筆も買えない貧しい木こりの家に生まれながら、「私もあの人と同じ人間だ、あの人が出来る事が私に出来ない事はない。」と努力した結果、アメリカ合衆国の第16代の大統領にまでなったこのお話を子供達が心にとめてくれた事が、どんなにかうれしかったことか。

一昨年、大分からの帰りの電車の中で、私の前に高校生と思われる男の子が元気がなく憔悴しきって窓にもたれていた。その姿を見た私は、学校で何かあったなと思い「僕どうしたの元気がないね。」と尋ねると「テストの結果がよくなかった」と言う。「なーんだその位のこと、長い人生から見たら点をついた程もないよ。」と私は言いながら大分別府の13分の間、「『彼も人なり我も人　努めて及ばぬことやある』同じ人間なのにあの人が出来て自分が出来ぬという事はない。出来ないのは自分が身を入れて真剣にやらないからよ。努力は人を裏切らないよ。あせらず、コツコツと、怠らずに、計画性をもって勉強していってごらん、必ず明るい光がさして来るよ。」と、何とか元気づけようとおしゃべりをしました。どうもつまらぬ事をしゃべったのではないかと反省しながら、電車を降りて堀田行きのバスに右足を一歩入れようとした時、バタバタバタと走って来る先程の男子生徒の姿を見るや「おばちゃん!! ありがとう！僕がんばりまーす。」と大きな声で礼を言ってくれた時、全身から喜びがあふれ「元気を出すのよ。」と叫びました。町の片隅のババのお話をよくぞ聞いてくれました。ひとり楽しくバスにゆられて帰りました。

今は母の言った一言一言が事ある毎に懐かしく思い出され、私の生き方を気づかせてくれています。私にとって母の言葉は暗夜の「ともしび」に等しく、今更ながら母の深い愛情に感謝の念でいっぱいです。

「一般の部」優秀作品

「顔を見る教育」

池永　朋美

小学校の６年間は、社会生活の第一歩であり、最も長期間教育を受ける場という意味でも、影響力は大きい。学問だけでなく、人とのコミュニケーションのとり方、ものに対する基本的な見方などを学ぶ小学校教育は、私にとって人生の「原点」ともなっているような気がする。

３年の時の担任は、若い男の先生だった。朝も昼休みも、子どもとドッジボールをし、よく課外授業と称して近くの山へも連れていってくれた。そして教室での授業では、一人一人のその日の様子や、得意、不得意をよく把握してくれていたように思う。今思えば、休み時間や校外活動の中で、子どもの心の状態や人間関係を観察してくれていたのだろう。自分をわかってくれているという無言の信頼が、授業中にも安心感となって存在し、いろんな発言がにぎやかに飛びかった。

授業方法も、時にユニークだった。ピアノやそろばんなどを使う単元では、先生は笑ってこう言った。

「先生は下手くそやからな。そろばんが上手なやつ前に出てこーい。」

その時間限りの子ども先生が、そろばんの使い方を教え、他の子がそれを真似し、先生はニコニコと見守っていた。ピアノも同じ。前で教える子の目の輝きも、習う側のしんけんさも、ただ一方的に教えられ、覚えさせられるのとは、ずいぶん違った気がする。

子どもの気持ちや状態をよく把握し、その上で子どもの自主性をひき出し、見守ってくれる指導だった。ある日、体調を崩した私が、教室で吐き気を催し、給食をもどしてしまったことがあった。私をトイレに連れていってくれた先生は、静かに言った。

「いいか。教室に戻っても、吐いた物を片づけなくていいから、座っとけ。」

汚した張本人が、何もせずにい

るのはひどく居心地悪く、後ろめたい感じがしたが、言われたとおりにしていた。しかし、汚物はみんなが遠まきに眺める中放置され、私は非難のまなざしを受けた。その時。

「具合の悪い友達の立場になって考えてみろ。自分が気持ち悪くて吐いたとき、どうされたいのか、考えてほしいんや。」

先生の言葉に教室は静まり返り、何人もの子が進んで掃除をひきうけてくれた。

こんないくつもの小さな事件をのりこえながら、私たちは協力や思いやりを学んだ。家庭という小さな輪の中だけでは気付けないことが多かったと思う。

遠足で、お弁当の包みをひらいたとたん、ひっくり返して、食べ物が全部土まみれになった友がいた。みんな自分の弁当からおかずを出しあい、空になった弁当箱をうめた。

運動が大の苦手な私は、逆上がりでも二重とびでも、いつもできずみじめだったが、何人もの友が放課後練習につきあってくれ、しんぼう強くこつを教えてくれた。できたときは、みなで拍手をしてくれた。

病気で何日も寝こみ、学校を休んだときは、６、７人もの友が、自分の家の庭に咲いていた花を手に、家まで訪ねてくれた。

心の教育には時間がかかる。教師の指導だけで、一朝一夕になるものではなかろう。家庭という素地も不可欠だと思う。けれど、信頼しあえる仲間がいて、自分を理解してくれる先生がいると、体で感じたとき、子どもは驚くほど成長をする可能性を持っているのではないだろうか。

最近、教師の雑務が増え、研修や研究のために忙しさも増し、子どもと接する時間が少なくなっていると聞く。学力低下が叫ばれる今、教育界全体が試行錯誤している時期なのかもしれないが、やはり小学校では顔と顔を見つめあうような教育こそが、子どもの心を育ててくれると信じる。私の息子が、将来、小学校ですばらしい先生や友達と出会ってくれることを願っている。

「一般の部」優秀作品

「私が教えられたこと」

岡本　京子

「道というものは最初からあるものではない。多くの者が歩いたそののち初めて道となる。誰かが最初の一歩を踏み出し、道を作るのだ。」

この文章を目にした時、一人の中学生を思い出した。私が彼女に出会ったのは、今からもう13年も前のことだった。聴力が弱い彼女を担任したのだ。初めて、教室に行くとみるからに不服そうに、一人座っていた。「私は皆と同じクラスで十分やっていける。それで十分なのに。」ときれいな文字で紙に書き、すっと私の前に出した。書かれた文字が少ないだけに、彼女の苛立つ気持ちを感じた。そう彼女は聴力のことを除けば、自信も希望も人一倍大きく膨らませていたのである。それが「『難聴学級』で叶わぬものになるのではないか。」と不安だったのだろう。その日から国語・英語・社会等の教科以上にいろいろな考えや思いを話した。時には、彼女は筆談でこちらがドキリとする指摘や批判を言う。何度かは、「鬼」という言葉を残して、教室からスタスタと出て行かれたこともあった。彼女にとって、私は、彼女の要求になかなか「うん」と言わぬ理解の足りぬ(？)教師であったらしい。暫くすると二人の会話の手段をどうするかということが問題になった。「今までの先生は筆談か手話。それで十分わかったので先生もそうして」と彼女。しかし、口話練習を幼児期から現在までしていることを知っている私は、「口話にしよう。あなたの肉声を聞きたい。会話しよう」と主張する。「絶対にイヤ。他人に、声を聞かれたくない。先生こそ手話を覚えるのが面倒だからそう言うんやろ？」徹底抗戦である。彼女は怖がっている。自分の声を自分の耳で確かめられぬことへの不安が、人との会話を躊躇させているのだと思った。「もし聞き取れなかったら、聞き直す。それでも分からなかったら、筆談で聞く。紙に鬼と書かれても、気持ちがわからん。」今思えば、聞こえる者の押しつけだ

ったのかもしれない。しかし、自信も経験もないが、私は必死だった。「彼女が持つ本から学んだ『知識』を、直接多くの人と関わり、体験を増やせば、『知恵』に育てることができる。もっと彼女の可能性が広がる。今までいた世界とは全く違う世界に、あえて身を置くことは、彼女の個性をつくりだすに違いない。」と考えたのだ。当然、疎外感をもち、逆に引き下がることもあるだろうが、配慮やアドバイスをし、多くの人で支えれば、何よりも彼女なら本人の努力で乗り越えられると考えた。その後の数ヶ月は、「話し声を聞かれたくない」という彼女と「話してくれる言葉を聞き取れず悪戦苦闘する」私との我慢比べであった。しかし、いつしか二人での会話に筆談が減り、憎まれ口も泣き言も肉声で話せるようになるとぐっと心が近づいた。そんなある日、彼女が何気なくこう話し始めた。「今まで世の中で、耳が聞こえないと諦めなければならなかったことも、もし私が最初にやれば、きっと皆が耳が聞こえない人もできるとわかる。頑張って、私は最初を歩こうと思う。」と。

現在、高校入試でのリスニングの注意事項に「難聴等のためリスニングに配慮が必要な方は申し出てください。」という一文が書かれている。これには、彼女が出した何枚もの要望書と「努力しても聞けない能力を見るのではなく、努力してもっている私の能力を見て下さい。」という訴えがあったのだ。今まで諦めていたことを彼女は諦めなかった。勇気ある一歩が、周囲の人を動かし、きまりを変えた。道となり、今、そこを多くの人が歩いている。あの日聞いた言葉は、13、4歳の少女が、それまでの体験から導いた生き方そのものだったのだ。今も「自分が住む町で、誰かの光となりたい」と自分を生かし、精一杯生きている彼女に教えられる。人は、年齢にかかわらず、人として尊敬し、共感する人と出会う。私にとって、それが彼女であったのだ。

「小・中・高等学校の部」最優秀作品

「おはよう、おじちゃん」

日出町立日出小学校３年（当時）　須股　凜

「おう、おはよう。」

毎朝、おじちゃんはにっこり笑って声をかけてくれます。わたしもあわてて、

「おはよう、おじちゃん。」と言います。

おじちゃんは、交通指どう員さんです。家の近くの国道の横だん歩道に、毎朝立って、黄色のはたを持ってわたしたちを横だんさせてくれます。４車線もある国道は、どの車もすごいスピードで走るのでとても大きな音がしてこわいです。信号が黄色になっても、止まってくれない車もあります。だから、お母さんから、横だん歩道の信号が青になっても車が止まったかたしかめてわたるようにと何度も言われています。でも、朝は交通指どう員のおじちゃんがいてくれるので安心です。

おじちゃんは、車の信号が黄色になると、はたを高く上げて、横だん歩道に少し出ます。そうすると車はちゃんと止まってくれます。わたしたちが横だん歩道を歩き始めると、おじちゃんは、道路のまん中で通せんぼをするように大きく手を横に広げて立っています。わたしたちがちゃんとわたりおわるまで、守ってくれているのです。時々、おじちゃんは、わたしたちといっしょに、道路をわたることもあります。それから、また元の場所にもどるみたいです。

雨の日もおじちゃんは立ってくれています。カッパのようなものを着てかさはさしていません。長いひさしのあるぼうしをかぶっているけど、顔や手はぬれています。わたしは、それを見て、「おじちゃん、かさをさせばいいのになぁ。でも、かさをさしたらはたを上げにくいのかなぁ。おじちゃん、すごい。」と思いました。

風が強い日も、暑い日もいつもおじちゃんは立ってくれています。冬の寒い日は、コートを着たおじちゃんがいました。雪がつもった日もおじちゃんはわたしたちを待ってくれていました。

「おはよう。」

と言ったおじちゃんの息が白くて、わたしは、「こんな寒い日は立たんでもいいのになぁ。」と思いました。

わたしは、お母さんに、

「おじちゃんの仕事は、交通指どう員さんなの。」

とたずねました。すると、お母さんは、

「ううん、たぶんちがうよ。本当の仕事は、ほかにあると思うよ。朝の交通指どうの仕事は、みんなが交通事故にあわないようにボランティアで立ってくれているんだよ。お母さんなら、たのまれても毎朝はできんなぁ。」

と言いました。わたしは、それを聞いてびっくりしました。仕事でもないし、わたしたちのお父さんでもおじいちゃんでもないのに、どうしておじちゃんは毎朝立ってくれるのかなぁとふしぎでした。わたしもお母さんと同じで、できないかもしれません。「おじちゃんってやさしいなぁ。」と思いました。

お母さんが、

「朝は車が多いし、あの交通指どう員のおじちゃんがいてくれんかったら、交通事故が起きてたかもしれん。」

と言いました。わたしは、「おじちゃんがわたしたちのいのちを守ってくれているんだ。」と思いました。

わたしたちの学校の近くの横だん歩道には、ほかの交通指どう員さんたちも立ってくれています。わたしは、わたしたちがいろんな人たちのやさしい心で守られていることに、はじめて気がつきました。いつもあたり前のように思っていたけど、本当はそうじゃなかったことを知りました。

これから、おじちゃんに会ったときは、わたしから先に、「おじちゃん、おはようございます。いつもありがとう。」とあいさつしようと思います。そして、おじちゃんの、「はい、行っておいで。」を聞きながら、わたしもやさしい気もちで登校したいと思います。わたしもやさしい人になります。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「命あるかぎり」

県立大分豊府中学校１年（当時）　伊澤　春香

６年生の冬、私に命の大切さを教えてくれたのは、担任の先生でした。

その日の命についての授業は、最初からいつもとは違う表情の先生がいました。他の学校の先生方の視線を強く感じながらチャイムの音で、授業が始まりました。この日の授業で先生は思い出したくないはずなのに、すごく悲しくつらいはずなのに、たくさんの涙を流しながらも最愛の娘の死について語ってくれました。原因も分からない病気だったこと、まだとても若かったこと、つらかった日々などを真剣に話し、命の大切さ、身近で大切な命を失うことの悲しみを強く訴えかけてくれました。先生は今まで懸命に娘さんの命を支え、守りつづけたと思います。そして何よりもその命を産んだのは先生です。又、その大切な大切な命の火がだんだんと小さく、弱々しくなり、消えていったのを見たのも先生自身だと思います。そんな先生だからこそ、その命の火が消えたときの悲しみは、はかりしれないものだったろうし、その悲しみはいくら泣いてもいくら叫んでもなくなるはずがないと思います。いろいろな先生の悲しみ、体験をきいて私は三つのことを考えました。

まず一つ目は、今自分がこうやって充実をした生活を送れているということに対して本当に喜びながら生きようということです。先生の娘さんのように急に病気になって死んでしまう人や突然事故にあう人もいるし、今自分が生きていられるのは、今までの祖先の人々のつながりがあってこそだということを知り、今この一瞬を「私」という形で生きていられるということがどんなに幸せなことかがすごく良く分かりました。

「今ここで　生きていられる　その喜び」

この句は私が６年生の時に書いた命の授業後の俳句で決してうまい作品ではないけれど、今生きて

いられるということを喜ぶという自分の思いを強く表しました。この俳句の言葉どおり、今ここで生きている、生かされているという喜びを一生の間、常に忘れずに生きていきたいです。

二つ目は、命をなくしたらもう二度と同じ命はもどらないということです。もし「人生」が一つのゲームだとすれば、もし死んだとしてもまたリセットボタンを押せば同じ人物がまた命をもって出てきます。本当にリセットボタンがあればそんなに大切にする必要もないけれど、「人生」にはリセットボタンは存在しません。だからこそこのたった一つでどんなものよりも大切な命を絶対に、失ってはいけないと思いました。

三つ目は、今以上に命を大切にし先生の娘さんの分まで一生懸命生きようということ。先生の娘さんだけでなく、世界中には生きたくても生きられなくて死んでしまった人は数えきれないほどいます。そんな人たちのためにも、「どのような道を　どのように歩くとも　いのちいっぱい生きればいいぞ」という相田みつをさんの詩のように私の道を生きていくなかで、私の命があるかぎり、懸命に生きていきたいです。

この三つのことをいつまでも忘れずに生きていきたいと思います。このごろ自殺が増えてきています。少しの失敗、いやなことがたとえあったとしても簡単に命を捨ててほしくないです。

命の授業は私の中で一生忘れられない授業です。これからも、いのちいっぱいに生きていきたいです。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「ホスピスで学んだこと」

岩田高等学校２年（当時）　貝掛柚香子

「今を生きる」

このたった五文字の言葉の重みを感じたことがありますか？命を大切にとか、人の命は地球より重いとか、そういう言葉をよく聞きますが、その大切さや重さは実感の乏しいものです。頭では分かっていても、死はどういう意味を持つのか、周囲の人がどれだけ痛手を受けるのか、本当のところはよく分からないのです。それは、私たちのすぐそばに「死」というものが存在しているのにもかかわらず、全く意識することがないからです。けれど、「生」と「死」は必ず背中合わせにあり、生きとし生けるものすべてにつきまとっています。その重みを教えてくれたのは、ホスピスで「今を生きる」人々でした。

私の学校のギター部は、演奏活動の一環として、ボランティアでいろいろな所へ慰問演奏に出かけています。ある時、とある病院が併設しているホスピスにギターを抱えて訪問しました。ホスピスとは、癌などの末期患者さんの苦痛を軽減し、残された時間を充実して生きられることを目的とした施設です。その入り口には、少し粗い絵が掛けてありました。それは、絵を描くことが大好きだった入所患者さんが、最後に描きたかったと言っていた風景で、未完成のままお亡くなりになってしまったものなのだと院長先生からお言葉がありました。その先制パンチともいえる重さに出迎えられ、どんよりとした気分でホールに歩んでいきました。でも、一歩中に踏み入れると、思いもよらぬ明るい歓声と大きな拍手が待っていたのです。そこには、年齢はさまざまながら、みんな少年のように目をキラキラさせた人々がいました。楽しそうに手拍子し、大声で歌い、笑う、陽気な普通の人々でした。車椅子に乗っていらしたり、チューブがついたままであったりしても、それが単なるアクセサリーであるかの如く、元気そのものなのです。全く意外な光景でした。どんよりと重

い暗い空気と力ない人を想定し、どうやって元気づけようかと考えていたのに、そんな憂鬱気分の私たちに元気を与えてくれそうな勢いです。看護婦さんたちはまちまちの白衣で、お世話しているというよりは、娘さんたちがそばにいるという感じで、一緒に笑っているだけです。用意してくださったお茶会の席でも、雰囲気は変わりません。かつて病気で治療していた時は、痛さと不安でイライラし、奥様に当り散らしていたという人もいました。ここに来て、ようやく人間に戻れたのだというのです。自分が納得した無痛処置だけで、死に急がず、延命もしない。やり残したという気持ちがないように、好きなことを精一杯して快適に暮らし、同じ境遇の人たちと前向きに励ましあいながら、毎日を大切に過ごしているそうです。そうすることで、静かな穏やかな幕引きができると信じておられました。ここは自分の家なのだと、胸を張っておっしゃっていました。それでも、楽しくお茶していた友達が、次の日突然いなくなるということは頻繁にある寂しさらしく、でも、だからこそ今、この時を大切にしたいと感じられるそうです。残された家族は遺族会という集まりを定期的に行い、お互い励ましあいながら精一杯生きておられるそうです。

今は健康な私たちとて同じです。明日、突然交通事故で死ぬかもしれない。自分自身だけでなく、親や、友達がそうなるかもしれない。その時、後悔はしないか？優しく、相手を思いやって振る舞ったか？わがままや失言で、人を傷つけたりしてはいないか？常にそういう反省をしていないと、私たちは往々にしてミスを犯すのです。もしも自分や相手が死んでしまったら取り返しがつきません。一生懸命何事にも全力でがんばり、そうできるありがたさを感じながら、人にやさしく接して、時間を大切に過ごすべきだと、私はホスピスで学びました。元気だけでなく、「今を生きる」ヒントも彼らから頂いたのです。

「おおいた教育の日」エッセー

平成20年度
最優秀・優秀作品

テーマ：「私が教えられたこと」

「一般の部」最優秀作品

「Ｔ先生の答え」

有田　英樹

Ｔ先生は高校の化学の先生でした。

おそらく 50歳代中頃だったと思います。笑うと、目尻のしわがいっそう深くなる、そして、僕たち生徒よりずっと背が低い小柄な先生でした。

その日も、いつものように白衣で教壇に立っておられました。

授業は『共有結合とイオン結合』。僕は、ちんぷんかんぷんで頭を抱えていました。

授業の残り時間が５分くらいになった時のことでした。先生はいつものように「質問はないですか？」と甲高い声でおっしゃいました。するとＫ君が「はい！」と手を挙げたのです。

「はい、どうぞ。どんなことかな？」

先生は嬉しそうな顔でした。

「先生は、自然はシンプルで美しいと言われているのに、なぜ化学は複雑なんですか？」

「ほほう。複雑ですか？」

「今日の結合もそうです。」

「具体的に説明してくれるかな？」

「はい。どうして物質が結びつくのに『共有』とか『イオン』とかあるんですか？

どっちかひとつにしてくれって感じです。」

教室に笑いがもれました。

「君の質問は楽しいなあ。」

Ｔ先生も目尻のしわを深くされ、意外なことを言われました。

「君には、友達がいるかい？」

Ｋ君はきょとんとしました。そして、とまどいながら「はい、います。」と答えました。

「ああ、そうか。家族もいるよね？」

Ｋ君がうなずくとＴ先生は続けられました。

「恋人は？」

「いえ、まだ…。」

「いずれ、出会うでしょう。」

一呼吸おいて先生は言われまし

た。

「それが自然なんですよ。」

Ｋ君は目を丸くしました。

「君はいろんな人と結びついている。友達、家族、恋人…。そして、その結びつき方はいろいろだね。友情であり、親愛の情であり、愛情…。単純に一つの結びつきではないのです。君という一人の人間はシンプルで美しい。しかし、その単純さから生まれた関係は場合によって複雑なことがあるんです。」

先生は笑顔と真剣さで話を続けてくれました。

「自然界もそうなのです。単純で美しい真理は時として複雑な関係を見せてくれます。あえて、誤解を恐れずに言ってみましょうか。『共有結合』は友情であり、『イオン結合』は愛情なのです。そういう目で化学を学んでみてはどうですか？

私はそのように学んできました。

人も分子も、自然界の全ては、だから、学ぶに値するのです。私はそう信じています。お答えになったかな？」

教室の中に大きな拍手がおきました。

先生は一つの化学式も用いずに「共有結合」と「イオン結合」を語ってくれました。

受験を控えた僕たちに「進学」や「将来」という言葉を使わずに、学ぶということの価値を教えてくれました。

教育の荒廃が叫ばれ、問われている現代社会。

でも、いや、だからこそ…。

Ｔ先生の答えは、30年以上たった今も、まったく色あせていないんです。

「一般の部」優秀作品

「ボランティア活動の中で教わった人生」

吉岡　信子

私は、海外の貧しい国で、貧困と戦い、明日に命をつなぐ為に必死で今日を闘っている人達の姿を目にした。やせ細った薄汚れた体と服装、学童期の幼子が学校へも行けずに裸足のまま、路上で稼ぎをして生きている。目は何かに挑んでいるかのようにギラギラ、「今日を生きるのだ」という姿。

彼らに、「お前は、甘ったれ者だ。」と言われたような衝撃が私の全身を打った。

１．突然に夫を亡くしての私

夫は、県職員であった。59歳で退職を目前にして現職でこの世を去って行った。

夫は、生前私に「私達は公務員だ、自分の事より人様の事になるよう努めるのだよ。」と言っていた。毎日、風呂に一緒に入り、多くを語り合うのを楽しみとしていた。

「お母さん、結婚して 30年が経つと、互いが空気のような存在になったね。空気なくしては生きられない。これからが私達夫婦の本当の愛の深まりだよね。」

と語ってくれた夫が、ある日、突然に、一人分の片道切符を手に二度と帰れない所へと逝ってしまった。

夫に頼って生きていた私である。身体の中から全ての物が崩れ落ち、暗黒の底に落下して行く自分を感じた。「情けない、情けない。」が口癖となった。戸外では気丈に振る舞うが、我が家に一歩入るや涙、涙、涙の日々であった。

夜な夜な車を走らせ、死に場所も探した。

そんな気持ちでいた折、海外ボランティアに出て、貧しい生活の中で必死に生きている人達の姿を見た。いろいろな思いを胸に、彼らの必死で、その力強い生き方を見た。

２．海外ボランティアの中で生きる力を

「人に奉仕の心を大切に」生前、夫が語っていたことばを想いおこした。人生を悲観していた私が、友人の誘いで、ネパールへの教育援助活動に参加した。それから、カン

ボジアや中国へと自費の教育支援・援助に出かけて行った。

ピンとキリの人間社会をこの目で見た。

「人が、この世に命をもって生まれたかぎり、命を大切に生きて行くのだ」

という、生きている必死な姿に人生の多くの生き方を教えられたと同時に、私は生きて行く方向を見い出すことが出来た。

３．「自力の精神と奉仕の心」で生きる事を

私達、生活に恵まれている者が、貧しい人に一時的な哀れみの同情で感情的に物資を与えても、「害」になっても真の救済にはならない事も知った。グローバル的思考でボランティア活動の大切さと必要性を痛感させられた。「人生、前進あるのみ」と、私は夫との別れの苦しみの中で、周囲の人達から多くの教えと励ましをいただき、人生の生き方を教わった。

４．南米の盲学校で生きている喜びを知る

スペイン語の特訓を受け、夫の死後、国際協力事業団の一員となり、現職の教員として、南米パラグアイに「特殊教育援助」で派遣された。

単独で、スペイン語しか通じない国へ、１年間の任期で入り込んでいった。

現地の学校の職員達は、簡単に外国人の指導・援助を受け入れるものではない。外国からの援助慣れした所のある国、人達である。人材より物資・金が欲しいのである。

そんな中、１年の任期が２年に延長された。

ある日、私は、本音の訴えをした。

「私は、この国に物資や金の援助で来たのではない。他国の援助に頼らず、自力で生活、教育改善をしようとしないのか。」「日本は昔、敗戦で国民は食べものにも苦しんだ。しかし、日本人は侍魂で、人の助けを恥とし、立ち上がり、経済大国となった。人の援助に頼らないで欲しい。私が必要でなければ、日本へ帰る。」と、下手なスペイン語で熱弁した。「ありがとう。」「信子は私達の仲間だ。」との言葉に感謝、感動をした。

ボランティアは人の為にではなく、自分がボランティアされているのを教わった。

「一般の部」優秀作品

「心の声を交わしながら」

衛藤　浩明

「聞こえなければ、書けばいい。」

聴覚障がいの子と出会う前に、聴覚障がいについて何も知らない私は、本当に安易にそう考えたのです。言葉を獲得することが、いかに難しいかということも知らないままに。

私が、初めて聴覚に障がいをもつＡさんに出会ったのは、Ａさんが小学校に入学する少し前のことでした。お母さんと一緒に小学校を訪ねてきたその姿は、目がキラキラして笑顔がとっても素敵でした。挨拶をして頭を下げれば、ニコッと笑って頭を下げる姿をみて、実は聴こえているのではと勘違いするほどでした。だから、この子なら、小学校生活もうまくむかえられるのではないかという気持ちが大きかったのです。

そんな私でしたから、入学してからのＡさんとの日々は、悩みとの闘いの日々でした。頑張って勉強をしようとするＡさんを前にうまく言葉を伝えることさえできずにいる自分に、情けなさを覚えることばかりだったのです。しかし、毎日の授業を前に、落ち込んでばかりいるわけにはいきません。まず、私がしたことは、学校の中にある物や人物と言葉を結びつけることでした。「つくえ」とカードに書き、それを実際の机にはりつけて、発音させ文字にする活動を続けたのです。それも、一度ではありません。同じ言葉を何回も何回も繰り返したのです。人間が言葉を獲得するというのは、自分の発した言葉を耳で聴き、脳の中に言葉と実際の物を結びつけ、正しく記憶することができて初めて、自由に言葉として引き出すことができるのです。だからこそ、聴く体験を一度もしたことがないＡさんにとって、言葉の獲得は本当に難しい作業だったのです。「つくえ」と覚えることができたと思え

た次の日に、もう一度尋ねてみると、「ノート」と元気に答える姿をみて、気づかれないようにがっかりすることも数多くありました。

しかし、言葉はうまく交わせなくても、私達は心が離れていたわけではありません。お互いの顔をみつめ、体で表現することを続ける中で、心の声が少しずつ聴こえるようになってきたのです。今、どんなことに困り、喜び、挑戦しようとしているのかが、その体からダイレクトで伝わってくるのでした。またその事に気づいていたのは、私だけではありませんでした。Ａさんの周りにいつもいたクラスの仲間が、私よりももっと上手に、「今、机って言ったよ。」「私の名前も言ってくれたよ。」と、心の声を交わしてくれていたのでした。時には、Ａさんの言葉がはっきりと聞きとれず困っている私に、「先生。今、こう言っていたよ。」と、教えてくれる子もいて、私はそんな時、胸がいっぱいになり、かわりに言葉をなくしてしまうのでした。

私は、その後も、Ａさんを支援する立場にいることができたので、卒業にあたり、それまで関わっていただいた方と進路についての話し合いをさせていただきました。今の世の中は、まだまだ障がいを持った人達にとって、生きやすいものではありません。そんな世の中に、いずれ出ていくＡさんにとって、今どんな力をつけることが大切なのかを、本当に悩み、相談を重ね、結果として、地元の中学校へ進学することにしました。そこには、Ａさんのことを大切に考えて下さる先生方が待っていてくれたからです。そして、小学校を共にすごした仲間がいたからでした。

「教育って何だろう。」今、私は思います。

Ａさんに教えようとしていた私でしたが、一番教えられていたのは、私自身だったのです。教育とは、教えることだけでなく、迷いながら、共に生きていこうと努力することでもあるのではないかと思うようになりました。私は、これからもＡさんが、社会に出て自分を輝かせられるよう見守りたいと思っています。心の声を交わしながら…。

「小・中・高等学校の部」最優秀作品

「私が教えられたこと」

県立大分南高等学校３年（当時）　姫野　昂志

出会いによって人が変わることがあることを、私は高校生活によって初めて実感した。

若者は特にそうだが、現代人は外面にこだわったり、格好のいい言葉を使ったりと表面ばかりよく見えるように行動しがちだ。人間として大切なことは何かを考えて行動したりはしない。私もそのような風潮に流される一人だった。先生達が見ている前だけいい格好をして、見ていない時はサボる。そういう考えを常に持っていた。しかし、ある先生との出会いで考え方が全く変わってしまった。

それは、体育の先生でもあり、私が所属するサッカー部の顧問の先生でもある人との出会いだ。私は高いレベルでサッカーができ、自分のレベルアップができることを考えて高校を選んだ。実際に部の練習は厳しく充実感があった。だが、予想外だったことは、学校周りの草取りや行事の会場設営などを頻繁にさせられたことだ。部員数も多いので、正直なところサボろうと思えばいくらでもサボれた。しかし、そんなことはしたくないという心が先生と過ごす内に自分の中に育っていた。

今までの先生は、「やりなさい」と生徒に言うだけであり、何故か本気でやる気が起きなかった。だが、顧問の先生は違った。草取りや掃除、会場設営など全てに対して誰よりも動き、誰よりも汗をかいて動いていた。２年３年とクラス担任でもあったので毎回私はそういう背中を誰よりも近くで見てきた。いつも先生は言っていた。「裏と表を作るな」「やらされてやるならやらない方がいい」と。とても心に響く言葉であり、言われる度に自分の考えと行動を見つめ直すきっかけとなった。そして何より、無言のあの先生の背中にたくさんのことを教えられた気がする。

今では私は、掃除が大好きになった。誰よりも動き、気づかない所まできれいにするようになった。す

ると、とても気持ちがよいのだ。前までの自分の考えが情けなく恥ずかしく感じるほどだ。さらに何よりも変わったことは、誰も見ていない所でもやれるようになったことだ。これは簡単なようだがとても難しいことだと思う。一人で歩いていてゴミを見つけた時、見て見ぬふりをする人が多いだろう。今の私は何も考えずに拾える。これは自分がとても進歩したからだと思う。この行動は社会の一員として普通のことかもしれないが、こんな普通のことができないためにゴミのポイ捨てや自然破壊が増えてきているのではないだろうか。だから、今後は私が、友達などの中でも率先して動き、小さいことでも裏表なく行うことを広げたいと思う。

３年間でサッカーの技術も学んだが、それ以上に大切なことをたくさん学んだ。これは、勉強で人に勝つ、それよりも人間としてもっと大切なことだと私は考えている。

先生との出会いによって、私の考え方や生活、全てが変わった。夢であった体育教師も目標に変わり、今では先生のようになりたいと心から思っている。私が教師になったら今まで教えてもらったことを生かして「全力で何事にも取り組むことができ、裏と表を作らない生徒」を育てたい。そして信頼される教師になりたいと思う。さらに自分のチームを持ち、大好きなサッカーを教えたい。私の考えだが、しっかりとした生活面や日々の行動ができる選手がいい選手だ。一人ひとりがチームと自分の向上に向けて取り組み、仲間のことも思いやることができれば、最高のチームだと思う。これは試合に勝つことよりも大切なことだ。そんなチームを作りたい。

高校生活の中でたくさんのことを学んだが、何より自分の心を育てることを知ったのだと思う。先生に出会わなければ、前の小さい心のままだっただろうが、大きい心が今の私にはある。これから目標に向かって努力して、必ず教える立場に立ちたい。そして、この出会いに最高の恩返しができるよう、これからも「人間として大切なこと」を忘れずに、何事にも自分から取り組みたいと考えている。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「家族っていいな」

日出町立日出小学校４年（当時）　須股　蓮

「日田に異動することになった。」という父さんの言葉にぼくたち家族はみんなびっくりしました。それから一週間で父さんは日田に行ってしまいました。単身ふ任です。

残されたぼくたち家族４人は、みんなで協力することにしました。朝の洗たく物干しは、高校生の兄ちゃんがして、夕方取りこむのは、ぼくと、ふたごのりんがします。洗たく物をたたんでなおすのは母さんといっしょにします。母さんが、

「父さんがいなくなったから、みんなで仲よくしよう。」

と言いました。ぼくは、今までも父さんはいないことが多かったし、あまり変わりないなあと思っていました。

でも、父さんがいない朝は、何だかさびしく感じました。心細いような気がしました。また、夕方いつも帰ってくる時刻になっても父さんが帰ってこないので、とってもさびしくなります。だから、毎ばん、電話やメールをすることにしました。「ごはん食べたの。」とか「今、何をしてる。」とか、毎日、同じことを話します。でも、それだけで、ちょっとほっとするのです。何かの用事で、電話やメールが届かない日は、何だか気になります。父さん、元気かなあと思います。

夕食もだいたいぼくとりんと母さんの３人で食べることが多くなりました。兄ちゃんは部活動でおそくなるのです。兄ちゃんが帰ってくると、ぼくは少し安心します。家族が４人になるからです。

母さんは、父さんが日田に行ってしまってから、ますますいそがしくなりました。今まで、父さんがしていた家の仕事もみんな母さんがしなければならなくなりました。そして、仕事に行って、夕方くたびれて帰ってきます。ぼくは、母さんかわいそうだなあと思いました。だから、ぼくたちもできることをしようと思いました。母さんは、ぼくたちにいつも、

「仲よくしなさい。」
と言います。ぼくとりんがいつもけんかをするからです。母さんは、
「家族がはなればなれの時は、いつもより、もっともっと仲よくせんとだめなの。」
と言います。ぼくは、そうかなあと思います。
父さんは、いつも金曜日の夜に帰ってきます。金曜日の朝になると、今日父さんが帰ってくるんだとうれしくなります。父さんが帰ってきた夕食は、にぎやかです。野菜が不足しているからと、母さんが野菜料理をならべます。そして、ぼくたちは、一週間分のおもしろかった話や楽しい話をします。父さんは、
「日田に単身ふ任してみて、初めて家族のありがたさがわかったよ。一人で部屋にいても何もすることがない。」
と言います。母さんは、
「家族のよさがわかってよかった。」
と言います。それまで、父さんと母さんは、けんかもしていました。母さんが、「父さんは自分のことばかり」とおこっていることもありました。ぼくは、父さんは日田に行って一人ぼっちになって、修行したのかなと思いました。ぼくたちも、今の父さんの方が前よりもやさしくなったような気がします。
家族がはなればなれになって初めてぼくたちは家族のことを考えることができました。今までは、あたりまえのように思っていて、みんな思いやりの気持ちがたりなかったのかもしれません。家族っていいなと思います。
母さんの言うように、「仲よしが一番。はなればなれの時ほど仲よくする」なのかもしれないなと思いました。父さんは、いつもどってくるのかわかりません。ぼくは、それまでみんなで協力して母さんを助けようと思います。そして、もっともっと楽しい家族になるために、みんなで仲よくしたいなと思います。
仲よくするってことは、相手のことを思うことなのかなと感じます。家族や友だちのことを思いやることができる人になります。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「いま、学ぶということ」

佐伯市立蒲江翔南中学校２年（当時）　古田　慧介

小さい頃触れた土の感触、覚えているだろうか。日の光をいっぱいに浴び、手に取るとほんのり温かい。お日様のにおいだ。バケツに水をくんでくる。少しずつ加えながら丸めてゆく。水は多くても少なくてもいけない。適度な湿り気は強度を増すが、うっかり多く入れたなら、途端にその形を変えてゆく。最後に地面の一番上にある良く乾いた砂の土をまわりにほどこす。何度も何度も手のひらで転がし丸め、ゆがみのない球体に仕上がった時は「どうだ」と言わんばかりに友達どうし見せ合った。茶色く、ツヤこそ無いが宝石のように大事に作りあげた「どろだんご」。

小さい頃は誰でも一度は作って遊んだどろだんご。その感触や出来不出来で友達と競い合ったことは多くの人が記憶にとどめているだろう。懐かしく、無邪気な子どもの思い出。

そのどろだんごを先日テレビのニュースで偶然見かけた。しかも今夏話題になった北海道洞爺湖サミットの記事だ。岐阜県高山市在住の左官、挾土秀平氏がサミットでどろだんごを披露するというものだった。映像で見ると「これが泥で出来ているの？」とただ驚くばかりだった。美しくまるで磨かれた玉の様だ。挾土氏は国内でも屈指の左官技能士でその高い技術力と群を抜くセンスは左官業という一業種だけでは収まりきれない逸材である。彼のホームページでその魅力の一部をかいま見ることが出来る。僕はそのどろだんごの美しさに圧倒されたが、もっと驚いたのはサミットで来日された各国首脳夫人に泥を触らせ、団子にせよということだ。「地球は大きなどろだんごだ。」挾土氏は言う。「北朝鮮とアメリカの土を混ぜてどろだんごを作れば世界平和、地球は一つだ。」

なんということだ。どろだんご一つでこの人は世界平和を語るのか。驚いた僕の目の前で福田総理夫人がにこにこしながら泥を丸めるあ

のしぐさを始めたではないか。それにつられ各国首脳夫人もおのずと手が動きにこやかな顔つきになった。「ああ、僕もああやって泥をこねた。くるくる。」両手のひらを合わせつぶさないようにくるくると回しながら形を整えていくどろだんご。大人も子どもも一緒なんだなあとつくづく思った。

子どもの時の体験は人の人格を形成する上で必要不可欠だ。泥をこねる遊び一つをとっても土と水、湿度や感触を身体全部、五感をいっぱいに使って感じ、また覚え、自身の経験の一つとして記憶という引き出しに収められる。

今、僕たちは学生生活のまっただ中にいる。毎日勉強、部活の繰り返しだ。これからどんどん学習内容やその量は増えていくだろう。けれど教室や教科書の中から学ぶことだけが僕らのすべてじゃない。家族や友人、あいさつを交わす地域の人々。みんなに支えられ、そして教えられる。教えられたことは自身が経験してみてはじめて自己の知識となりまた引き出しへと収められる。少しずつその中身は増え、僕らを大人へと導く。ただ、覚えるだけではなくやってみる。触ってみる。考えてみる。こうやって机の上の知識を身につけていくことが本当の学びではないだろうか。僕がどろだんごを作ったあの頃はただ楽しかった。それだけで良かった。でも今、ニュースでどろだんごの映像を見たとき新鮮なあの頃のおもしろさ、わくわくする感じが戻ってきた。首相夫人がほほえみながら泥を丸めるしぐさをしたのは本当に自然な感じがした。小さい頃誰もが経験する遊びを通して今、地球環境や世界平和に取り組むことが出来る。学びの材料はいつも身近だということだ。山のような宿題や課題に追われることがしばしばだが、時には手を止め僕らを取り巻く大きな世界と身の周りの温かい人々から何かを学び取ることも必要だと改めて思った。

「おおいた教育の日」エッセー

平成21年度
最優秀・優秀作品

テーマ：「私が教えられたこと」

「一般の部」最優秀作品

「みんなで登ろ！」

渡邉　一司

「先生、足が痛い・・・」

光一君が４年生の１月のことであった。新春駅伝大会を間近にひかえ、朝練習が続けられていた頃のことである。

耐え難い痛みを訴える光一君の表情に、ただならぬものを感じたその当時の担任は、すぐにご両親と連絡をとった。お父さんとお母さんも時折、光一君が言う「足が何となく痛い」という言葉が気になっていたものの、成長に伴う一過性のものだろうと話し合っていた。しかし、この日の痛みはいつもとまったく違っていた。

翌日、ご両親は光一君を車に乗せ、総合病院を訪ねた。

「ペルテス病です。」

診察･検査の後、医師はご両親にそう告げた。

「血行の障害から、大腿骨の骨頭が壊死していく病気です。治る病気ですが、数年の時間がかかります。手術も必要ですし、その後の経過観察も重要です。そして・・・学校での日常生活ですが、右脚の負担を軽減させるため、装具が必要です。」

間近に迫った駅伝大会や５年生での大運動会、そして登下校や学校生活。そして、数年とはいえいつ治るのだろう、後遺症は・・・。

次から次にたくさんのことが頭をよぎった。

新年度になり光一君は５年生になった。移動したばかりの新しい教室に、目を輝かせた28人の子どもたちがいた。真っ先に光一君の右脚につけられた装具が目に入った。前担任から引継ぎは受けていたものの、腰に巻かれた幅の広い革のベルトや右脚を支えるための金属製のバーが、私にはとても大きく感じられた。10歳の光一君にとっても必要不可欠とは言え、とてもとても大きく重い装具であった。

学級で課題がもち上がるたびに学級会を開いていた。議題の中に、光一君に関することも当然提案がなされた。階段の昇り降り、教室の

移動、給食当番や清掃活動、体育の授業や学校行事。そのたびに、話し合いを持ち子どもたちにより良い解決の方法を考えさせ、子どもたちはそれを実行していた。

５月の連休後のある放課後。給食コンテナ置き場の横に光一君が立っていた。そして足元にはクラス一の元気者の健太君。何をしているかそっと近寄ってみると、健太君が手を油まみれにして、光一君の装具を修理していた。職員室からねじ回しやスパナを借りて。私は近寄り健太君の頭を思いっきりなでた。二人の顔がにっこりほほ笑んでいた。

秋の鍛錬遠足。宇佐神宮の東にそびえる御許山に登ることが恒例であった。

「光一君はどうやって御許山に登るんですか。」と友子さんの声。早速、いつものように学級会が開かれた。

「保健室にある担架に乗せてみんなで頂上まで運んだらどうですか。」

「私たち子どもの力では無理だと思います。」

「乳母車に乗せて代わり番こに押したらどうですか。」

「６年生が御許山はとても険しいと言っていたのでとても難しいと思います。」

その時、文昭君がすっと挙手して立ち上がると、

「御許山に光一君が登るのは無理だと思います。もう少し楽な鷹栖観音ならみんなで登られると思います。みんなどうですか。」

教室が大きな拍手に包まれた。子どもたちの要望を校長先生に伝える役割が私となり、その案が許可されたことを伝えると教室は前よりもっと大きな拍手に包まれ、その心地よい音の中で光一君はニコニコしていた。

「先生！」

大分県立歴史博物館を出たところで後ろから声を掛けられた。振り返ると私の背丈を越えた光一君が立っていた。立派な若者に成長した光一君の脚には彼を支え続けた装具は無かった。

夢中で話した。車の部品を作っていること。仕事の創意工夫。すでに部下がいること。春の結婚のこと。彼は自分の人生を今、ご両親とおばあちゃん、未来の花嫁そして多くの仲間たちと登っていた。

※文中の名前は仮名です。

「一般の部」優秀作品

「人を大切にすることを教えてくれた祖母」

糸永ケサヨ

私は太平洋戦争が始まった翌年の昭和17年４月、国民学校（小学校）に入学しました。

その頃、家近くの川を挟んだ向こうに、古い家を借りて朝鮮の人が住んでいました。当時は、日本が植民地支配をしていた朝鮮の人を、大人の人々は見下して馬鹿にし、子どもたちも当然それを見習っていました。

ある日学校から帰る途中の男の子数名が、その人を「朝鮮人」と罵りながら石を投げていました。それを見た祖母は、「あん人はなんにも悪いことをしちょらん、日本に来ち一生懸命に働きよるのに、あげなことをするもんじゃねえ。お前があげなことをしたら、ご飯をたべさせん。」と強く言いました。

私は石を投げられている朝鮮の人を可哀想と思っていましたが、祖母の言葉ではっきりと、罪もない弱い人を見下したり苛めることが誤りであることを深く心に刻みました。

戦争が激しくなるにつれ、あちこちの家からお父さんやお兄さんが出征して戦場に行きました。主な働き手のいない出征兵士の家に加勢に行くのを勤労奉仕と呼んでいました。田植え時に全校で勤労奉仕に行きました。私が行ったのは、ご主人が出征した朝鮮の人の家でした。当時は手で稲を植えましたが、まだ２年生の私は苗運びをしました。皆が協力して働き、田植えが終わりました。

大変に喜んだ朝鮮の人は、背に赤ちゃんをおんぶし、小さな女の子を連れて、両手に籠を提げて来ました。籠の中には豆ご飯のお握りが沢山入れてありました。それは、お礼のために乏しい食べ物を工面して作ったものでした。「ありがとうございました。これを沢山おあがり。」その人は感謝の気持ちを込めて言いながら、ござの上に置きました。

ところが作業の班長をしていた上級生が、「朝鮮人のママ（ご飯）

はいらんよ。」と大きな声で言い、皆を連れてその場を去って行きました。その人は悲しい顔をして、目にいっぱい涙をためているのがわかりました。

私は、祖母の言葉を思い出しました。せっかく作ってくれた、そのお握りのご飯を皆が一つでも食べて、美味しいとお礼を言えばいいのにと思いました。その場に立っていた私に班長が「はようこんかえ。」と命令するように言いました。私は、「ごめんなさい。」と心の中でわびながら皆の所に行きました。

大切な夫を戦争に送り、残された幼子を育てながら苦しい生活に耐えているのに、子どもたちからも馬鹿にされる。あの朝鮮の人は、どんなにか悲しく悔しかっただろうかと、思い出す度に今も胸が痛みます。

戦争中は人権など全く無視した時代で、多くの人々が朝鮮や中国など他民族の人を蔑視していました。しかし祖母の言葉は、私の心の底から離れませんでした。祖母の言葉とともに、その後学習会で人権について学び、私は他の人を大切にして生きるように今日まで努力してきました。

本年の８月６日、依頼を受けて母校の国東市立武蔵西小学校で、戦争体験の話をしました。その中で、尊い命を奪う戦争の悲惨さと、朝鮮の人を差別した思い出を申し訳ない気持ちで語りました。全校児童の皆さんと先生方、ＰＴＡの方々が熱心に聞いて下さいました。中にはそっと涙をふく方もありました。

祖母は、仏教を深く信仰していました。神仏を敬い、人を大切にし、無益な殺生を戒め、物を粗末にせず、人間として正しい生き方を求めて生活をしていました。

幼少期の私は、農作業で忙しい母よりも、家にいた祖母に多くの話を聞いて育ちました。祖母から教えられた生活の知恵や生き方を、折に触れて人生の指針としています。

私は笑顔で人と接するように心がけていますが、「和顔」も祖母の教えの一つです。

「一般の部」優秀作品

「私が教えられたこと」

太田由紀子

今年、社会人６年目を迎えました。二十歳の春に、惣菜屋に準社員として入社しました。初めてする仕事ばかりで、最初は楽しい毎日を過ごしました。

半月の月日は、あっという間でした。傍で教えてくださった先輩はいなくなり、一人で一つのポジションを任されるようになりました。初めはスピードについていけず、あたふたとするばかりでした。また半月経った頃には、スピードについて行けるようになり、順調に５つのポジションを２年でこなせるように成長していきました。

当時の私は、負けず嫌いであったため、誰よりも仕事ができる人になりたいと思い、尊敬していた店長の良いところを見つけては、自分のものにできるように頑張りました。しかし、仕事にも慣れてきたころ、体力的な限界から疲労が溜まりはじめました。その頃の私は、店長と同等の立場になっており、一番の理解者は店長でした。きついときには、いつも店長に相談していました。

仕事は重労働で毎日時間に追われていましたが、従業員一人一人が自分のポジションをこなしていました。しかし、一人一人の作業にかかる時間が遅くなることもあり、できないところを自分の仕事とプラスアルファーでサポートしていました。それが毎日になり、私の仕事として受け入れられるようになった頃から、仕事に対しても従業員に対しても不満を感じるようになってしまいました。ただでさえ重労働であるにもかかわらず、サポート役にまで徹することになったからです。

ある日店長に相談すると、店長も同じ立場の経験をして、同じ不満を持っていたという話を聞き、少し気分を晴らすことができました。

店長は、苦労しながらも周りに気を遣ってくれ、誰からも信頼を受けていました。店長から言われた言葉があります。その言葉が、私を成長させるきっかけになったと言っても過言ではありません。

一人一人仕事にかかる時間が違ってあたりまえです。その人その人で順序が違ってあたりまえです。店長は教えてくれました。「受け入れたうえで仕事に取り組まないと仕方ないよ。」その言葉を、初めは素直に受け入れられませんでした。社会人４年目では、心が育っていなかったからです。店長は、１年後に退職してしまいました。尊敬していた人がいなくなると、相談できなくなり困ることが多くなりました。しかし、今まで教えられた事を思い出し、頑張ることができました。

「人は努力し、実る」という言葉がありますが、それは事実です。私は、係長や次長から責任者へのオファーがかかりました。その時、今までの苦労が報われたと感じました。しかし、結果としてはお断りさせていただきました。なぜなら、私には夢があったからです。

私は、夕方まで仕事をして、夜は学校に通っていました。３ヶ月通い、国家試験を受験しました。受験の１ヶ月後には、合格通知が届きました。私は、翌月に退職して医療事務員として転職することとなりました。

惣菜屋で学んだ事は、調理だけでなくたくさんありました。退職する頃には、他の従業員皆から慕われ、会社には一人前の人として認められました。自分の力を出しきった成果がもたらしたものだと思います。これからも、たくさん学び、もっと成長していきたいと思っています。

「小・中・高等学校の部」最優秀作品

「100キロメートル徒歩の旅で学んだこと」

中津市立鶴居小学校５年（当時）　楠　春華

「100キロメートル徒歩の旅に挑戦してみない。」お母さんが、とつぜん私に言いました。

「なにそれ。」

聞き返してみると、お母さんが、

「中津市の４年生から６年生で４泊５日、中津市の名所をめぐり、生きる力を育む100キロの旅のことよ。」と教えてくれました。

昨年のパンフレットを見ると、友達が一人で参加していたことに、すごいと思い、私にもできるかなと不安もあったけれど、参加を決定しました。

だんだんと当日が近づくと、私に100キロ歩くことができるだろうか、５日間も家族とはなれて生活することができるか不安になりました。そんなことばかり考えて、ねむれない夜が続きました。

そんな私に、お父さんやお母さんが、「もうすぐ100キロの旅だけど、だいじょうぶだよ。きっとたくさんの友達も出来るよ。毎日、春ちゃんのこと、考えているからね。」と言ってくれました。その言葉がはげみになりました。

当日、出発式のあるダイハツアリーナに行き、班分けをして、初めてリーダーのお姉さんやサブリーダーのお兄さんに会いました。リーダーやサブリーダーの人達は、高校生や大学生で、ボランティアで参加して、私たち参加者のおせわをしてくれるそうです。初めて会ったのに、とてもやさしくて、これからの100キロの旅が楽しみになってきました。

１日目スタート。５キロ、10キロ、15キロと歩いていきました。

「暑い、足がいたい、きついよー」と、声に出して言いたい気持ちをガマンして、団長の言っていた「できる、できる、必ずできる。」の言葉を信じて、18キロを歩きました。

夜、足がいたくて、なかなかねむれませんでした。まっ暗な体育館で、ライトを持って、見回りをしたり、せんぷうきをあててくれたり、会議をしているリーダー達がいました。私たちのことを守って、おせわをしてくれていると思ったら、明日もがんばろうという気持ちになりました。

２日目、かけ声をかけ合って歩いていると、一人の男の子が車道を走ってわたりました。
「どうして横断歩道をわたらないの。車が来たら、あぶないでしょ。」とリーダーがとても大きな声でおこっていました。いつもやさしいお姉さんが大きな声を出したので、びっくりしました。
でも、よく考えてみると、私たちの命を一番に考え、不注意な行動をしかったのだと思いました。今は、家族とはなれて、いっしょに旅をしているリーダーが、お父さん、お母さんがわりなんです。
３日目、雨の中、くつがびしょびしょになりながら、歩きました。
４日目、あと１日がんばれば、家に帰れると思い、つらい気持ちをふりしぼって歩きました。
５日目の朝、今日で、この仲間と最後の旅になると思うと、さみしい気持ちでゴールの中津城を目指して歩きました。ゴールには、お母さんが目を赤くして、待っていました。今まで、不安だった気持ちと、やっとゴールについた喜びと、４泊５日をいっしょにすごしてきた仲間との、別れを思いなみだが止まりませんでした。
私は、この100キロ徒歩の旅で、たくさんのことを学びました。
一つ目は、どんなに不安な時、苦しい時、あきらめそうになる時、「できる、できる、必ずできる。」と思えば、できないことは、何もないと知りました。
二つ目は、仲間の大切さです。いっしょに苦しい中、「がんばろうね。」「だいじょうぶ。」と声をかけてくれて、苦しい気持ちが楽になり、がんばれたのは、仲間のおかげです。
三つ目は、私たちのおせわをしてくれた、団長やリーダーへのかんしゃです。この100キロの旅までに、たくさんの研修をしたそうです。かけ声のれんしゅうや、コースの下見。じっさいに、雨の中を歩いたそうです。本当に、助けられました。
この三つを考えると、私一人では、この100キロの旅を完歩することができなかったと思います。私を支えてくれたたくさんの人たちがいたから、達成できたのだと思いました。
お母さんが、よく言う「人間一人では、生きられないのよ。人と人とが、支えあって助けられて、生かされているのよ。春ちゃんも、家族や、先生や友達やたくさんの人から支えられているのよ。」
やっと、その言葉が、この100キロメートル徒歩の旅で分かりました。
この夏、本当に価値のある夏の思い出ができました。また、来年も挑戦しようと思います。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「祖母からもらった勇気」

県立大分豊府中学校２年（当時）　渡邉　一路

「はよ治して、家に帰らんと。いつまでもこんな所で寝ちょられん。」

祖母のその言葉を聞くと、僕はいつも安心する。「ばあちゃん、まだ大丈夫やな。」とそんな気持ちになる。

祖母は抗がん剤を点滴する為、定期的に入院している。祖母とがんとの付き合いは、もう長く15年にもなるそうだ。10年間に二度の大手術を行い、片方の肺は全て摘出している。それなのに、また肺にがんはできてしまった。今度は非常に小さかったので、手術ではなく薬で治療していくこととなった。

僕は、手術よりも薬の方が楽だろうと思っていたが、そうでもなかった。点滴で薬を入れると、必ずと言っていい程、副作用が起こる。それは吐き気や発熱、髪の毛も抜けていく。食事も取れなくなり、体重も減っていく。しかし、祖母は「副作用は薬が効いている証拠。」といつも前向きだ。吐き気が治まりかけると、その時自分が食べられそうな物から少しずつ食べ始める。果物だったり、麺類だったり、時にはクリームソーダが飲みたいという。そして、祖母が「はよ帰らんと。」と言って食事を取り始めると、まるで何かのスイッチが入ったみたいにどんどん元気になっていく。

そんな祖母を見ていると、僕はある言葉を思い出す。病気は、気の持ち方によって良くも悪くもなるという「病は気から」という言葉だ。

僕は小さい頃から、風邪をひきかけたり、のどが痛くなると両親から「大丈夫よ。病気になんか負けんと思っとき。そうしたらひどくならんから。」とよく言われてきた。本当に気の持ちようで病気が良くなるのだろうかと疑問に思いながらも、とりあえず信じてきた。しかし、祖母の姿を見ていると、そんなこと

もあるのだなぁと思うようになってきた。

祖母の主治医の先生も「病気が治るのは薬との相性が３割、本人の気持ちが７割。」と言って、祖母の病気に向き合う姿勢をほめてくれる。確かに、早期にタイミング良くがんが見つかり、転移もないがんで運が良いということもあるが、やはり祖母はすごいと思う。

祖母が早く家に帰りたいには、理由がある。祖母は最初の手術後、退院してから病院の調理室に勤務しながら調理師免許を取得した。そして、祖父が自宅裏に加工場を建て、お餅等を作り出荷している。全て一人でするため作る量は少しであるが、作業する祖母は何よりも楽しそうである。

そんな祖母の姿を見て、僕が同じ立場だったらどうだろうと考えてみた。まず、がんと宣告された時、自分は病気ときちんと向き合えるだろうか。しかも、二度三度と繰り返してもしっかりと戦えるだろうか。病気のことだけではない。普段の学校生活においても、いろいろなことが起こりうる。問題や試練が起こったとき、そのこととしっかり向き合うことができるのだろうか。逃げ出してしまっては、何の解決にもならない。しっかりと前を向いて事態を受け止め、解決していくことの大切さを祖母は自ら実行して、教えてくれていると思う。

そして、祖母がしっかりと向き合えたのも目標があったからだと思う。退院をして商品をお客さんに届けてあげたいという気持ちが、何よりも大きく、生きる力になっているのだと思う。

僕は将来の目標について、今は漠然としか思い描けていない。しかし将来の目標が定まった時、強い意志を持ち、遠回りをしてでも目標を達成できるよう努力していこうと思う。また、そんな姿を祖母にずっと見ていて欲しいと思う。

「小・中・高等学校の部」優秀作品

「私が教えられたこと」

県立佐伯鶴城高等学校1年（当時）　佐脇　沙織

「そこが甘い」「自分で考えよるか」私が陸上部の顧問によく言われる言葉です。

高校に入学した頃の私には、この言葉が深い意味を持つことなど全く理解できませんでした。

陸上部に所属した私は、毎日放課後の2時間、走り高跳びを中心に練習をしています。その練習中に「腕を大きく振らないようにしよう」と思ってやってみても、腕を大きく振ってしまったり、「バーをよく見よう」と思っても、見ないで跳んでしまったりと、自分の思うようにならないことがほとんどでした。

その度に「そこが甘い」「自分で考えよるか」と言われますが、「そんなことはない。私は自分でしようと思っているけど、いつもの癖が出てしまうだけだ。」と毎回心の中で反抗し、素直にその言葉を受け入れようとはしませんでした。精一杯やったのにと思っていました。

しかしある日、どうしても記録が伸びずに苦しんでいた時に、先生の言葉を思い出し、「ともかく先生の言葉を受け入れ、改善してみよう。」と考え、先生が言ってくれたことを意識して跳ぶようにしはじめました。すると、今まで直らなかった自分の癖が徐々に改善されて行き、記録も伸びてきたのです。その時、「先生の指摘は当たっている」とはっきりと気づきました。と同時に「それまでの自分は、いつもの癖が、と言い訳をして甘えていただけだ」ということにも気づきました。そしてこれは、陸上だけのことではないと考える自分が生まれました。大好きな陸上に対してですら甘えているのですから、苦手な授業や集団生活ではもっと自分を甘やかしています。

授業に対して「予習をしておかなければ」と思っていても、「後からでいいや」と好きなことを優先させたり、「疲れているからもういい」と言い訳を考えたりしています。授業中も、わからないことが多く

なると楽しくなくなり、考えることを止めてしまいます。そして、周りの人が言う解答や板書内容をさっさと写すだけで、自分の頭の中で理解しようとはしていません。先生の「こうしたらできるようになる」と言うアドバイスも聞き流していました。自分を変えるという難しいことは、すぐに諦めてしまっていたのです。「自分に甘い私」と「自分で考えない私」がいつもいることに、先生の言葉のおかげで気づきました。

また、それまでの私は「相手の言葉」の表面を聞いているだけで、その言葉の「真意」を理解しようとはしていませんでした。自分で何とかできるからという気持ちが強かったのだと思います。では、なぜ自分だけでできると思い込んでしまっていたのでしょうか。

現代は、子どもでも携帯電話やテレビなど自分専用の情報源があります。そして、いつも大量の情報の中にいるので、人の言葉をいちいち受け止める余裕がありません。「何か知りたい時は、情報機器とお金があれば何とかなる」という考えも心のどこかに潜みます。その考えが、人と人との信頼関係を疎かにさせ、大人の言葉を排斥し、自分一人の世界に籠もらせてしまうのかもしれません。

このような現代っ子の陥りがちな罠に、きっと私も陥っていたのだと思います。その結果、何でもただ形だけ一生懸命にしているように見せ、実際には自分では何も考えず上辺だけやる癖がついていたのです。進歩があるはずがありません。

「まず先生から言われたことや自分の至らなさをしっかりと受け止める。そして、どうすれば改善できるか自分で考える。自分で考えることで上達が速くなる。上達が速くなることで練習や学習が楽しくなる。」強い選手や意欲のある生徒になる「近道」を、私はこの陸上部の先生の言葉によって、教えられました。

「そこが甘い」「自分で考えよるか」この言葉が確かに私を変えてくれたのです。どんなに便利な情報機器よりも、直接私に言葉を掛けてくれる人間の存在の方が、はるかに大切だと今の私にはわかります。

人の心を動かすことができるのは、人の心だけだということも。

「おおいた教育の日」エッセー作品集
平成 17 年度～平成 21 年度

平成 22 年 3 月

発行者　大分県教育の日推進会議　大分県教育委員会
〒 870-8503　大分市府内町 3 丁目 10 番 1 号
TEL　097-506-5526　FAX　097-506-1798
印　刷　明治印刷株式会社

手をつなぎ 広げていこう 教育の輪

11月1日は「おおいた教育の日」

「おおいた教育の日」シンボルマーク

教育（Education）の頭文字「E」をモチーフとし、子どもの可能性を無限大（∞）で象徴的に表し、それを大人が包み込むイメージを表しています。